

## ハンセン病と外島保養院

朝日新聞 1 月 29 日の夕刊に「ハンセン病主題の長編漫画」が大きく報じられていた。隔離の記憶「麦ばあの島」。物語では岡山県瀬戸内市沖の長島にある邑久光明園の前身で、大阪市内を流れる神崎川河口の中州にあった外島保養院も登場する。

この記事を読み大阪市立中央図書館で手にした小山仁示『戦争差別 公害』の「外島保養院事件」を思い起こした。戦前の差別と弾圧のなかでの事件であるが、台風被害のことも書かれている。



日本のハンセン病対策は、1907 年（明治 40）3 月公布の癩予防法によって大きな転機を迎えた。同年 7 月の内務省令に基づいて全国を 5 区域に分け、東京・青森・大阪・香川・熊本の 5 府県に各 1 か所、聯合府県立の療養所が設置されることになった。このとき大阪に設立されたのが第三区聯合府県立外島保養院である。大阪府西成郡川北村大字布屋新田の 2 万坪の土地（現在の西淀川区中島 2 丁目。中島工業団地の一部）が買収され、1908 年 11 月、外島と称する大字が設けられた。そして 1909 年 4 月に開院したのであった。ちなみに、癩予防法はこの年 4 月 1 日に施行された。ハンセン病が不治の病とされ、発病はすなわち人間社会からの抹殺に等しかった時代、ハンセン病患者を社会から隔離するための保養院の適地として選ばれたのが、現在の大阪市西淀川区中島の地であった。今でこそ中島工業団地を形成しているが、80 年前には外島の名にふさわしい「茅渚」（大阪湾のこと）の浜辺の絶域（遠く離れた土地）だったのである。



外島保養院は、1934 年 9 月 21 日の関西大風水害（室戸台風）で壊滅した。患者 173 人、職員 11 人、合計 187 人が亡くなった。高松の大島療養所から、職員と入園者各分 10 人、計 20 人が救護班を組織して、機帆船で荒れる海をこえて外島保養院に到着したのは 22 日午前 10 時のことであった。最重傷者 120 人を船に乗せ、高松に帰ったという。大阪府や大阪市の救助隊はなかなか到着しなかったのである。ハンセン病患者と職員は、自分たちで自分たちを守るしかなかったのである。

外島保養院の歴史的検討、さらにはハンセン病の現実を知ることは、私の長年の積み残した課題である。以前に収集した新聞記事を中心に、とりあえず紹介した次第である。

(2018 年 2 月 2 日)